

WTOは中国に何をもたらすか 経済専門家三人に聞く



二〇〇一年十一月十一日、中国のWTO加盟の議定書がドーハのシエラトンホテルで調印された。これを祝って中国の石広生、対外経済貿易部部長（右）とWTOのムーア事務局長が杯をあげた。（撮影・ドーハ）



上海の浦東の陸家嘴金融区は、世界の金融界がもつとも注目する所となった。（撮影・劉世昭）

——一九八六年七月十日、中国のジュネーブ駐在代表団の銭嘉東大使は中国政府を代表し、中国が関税貿易一般協定（ガット）の締約国の地位に復帰する申請を正式に提出した。一九九五年一月一日、世界貿易機関（WTO）が正式に成立し、中国は、今度は「ガット復帰」から「WTO加盟」へ交渉を転換した。二〇〇一年九月十七日午後三時、中国のWTO加盟の法的文書が通過し、二〇〇一年十一月十日午後、カタールの首都ドーハで開かれたWTOの第四回閣僚級会議で、中国のWTO加盟を承認する決議が、いかなる反対意見もなく通過した。十五年にわたる加盟交渉は最終的にピリオドが打たれた。

中国のWTO加盟交渉を、中国革命になぞらえて「十五年の長征」と呼ぶ人もいる。またこれは中国が経済のグローバル化に加わる「万里の長征」の第一歩で、中国が世界経済の主流に溶け込むまでには長く、漸進的な歴史の過程をへなければならぬという人もいる。いったいWTO加盟は中国に何をもたらすのか。本誌は中国の経済界の専門家や学者取材し、その意見を整理してみた。

発展の中で問題を解決する

中国改革基金会国民経済研究所所長 樊綱

たとえ中国がWTOに加盟しなくとも、これはやらなければならないのだ。中国が経済を発展させようと思えば、また競争力をつけようと思えば、こうした苦痛を伴う調整や改革はやらなければならない。ただ今よりも圧力を少し大きくし、少し速くするに過ぎない。そうすればかえって損失は少なくなる。やらなければ、幻想を抱いたまま、問題解決を遅らせるだけだ。



樊綱（撮影・楊振生）

WTO加盟は中国に何をもたらすのか。それはある意味で言えばはっきり言うことができない。なぜなら、一つの研究の結果で人々を満足させ、信用させるというわけにはいかないからだ。また、問題は非常に大きく、かつ非常に総合的であるからだ。

さまざまな部門がみな影響を受ける。その影響にはプラスのものもあり、マイナスのものもあり、また各部門の間で、相互の、間接的な、交錯する影響もある。そこで、短期、中期、長期の時間の縦軸と、各部門の構造という横軸の二つの角度から、この問題を論じなければならぬ。

縦軸から見れば、短期的には中国の経済成長に積極的な影響を与えるだろう。一、二年の間は、輸出が増加するに違いない。なぜなら、我が国の多くの輸出制限が取り消されるからだ。同時に輸入も増加するだろう。しかしその増加はそれほど急ではない。なぜなら、我が国の多くの貿易障壁は、だんだんに打開されていくからである。輸出入全体に対して積極的な推進作用をはたさそう。

別の面から見れば、二〇〇〇年に中国がWTOに加盟すると言われ始めてから、外資の流入

は増加し、二〇〇一年上半期には実質二〇％増加した。外資との投資の協議もすでに四〇〜五〇％増加している。これは中国経済が今後良くなる予測されているからで、外国の投資家の中国投資に対する確信も強まったからである。しかし、二、三年後には、競争による圧力が明らかになってくる。調整や改革の成果も現れてくるだろう。たぶん、ある部門にとっては、かなり苦痛を伴う時期となるだろう。長期的に見れば、これがWTO加盟のもつとも重要な意義なのだが、外的な力の介入によって中国の改革が新たな段階に押し上げられるということができ

る。

横軸から見れば、それぞれの部門が受ける影響は同じではない。

製造業の問題は基本的に大きくはない。少数の、独占的な部門を除けば、近年、製造業はすでに外国資本にも国内資本にも開放され、競争はすでに十分に行われるようになり、多くの部門で民営企業が主要な地位を占めるようになった。そうした企業はすでに国際競争力が備わり、実際、国外に製品を売っているし、国内でも市場を席巻している。そのうえ、外国製品に対する関税が低くなることによる圧力も大きくはない。

農業は関税が低くなり、一七％になるだろう。その関税の下げ幅にはまだ余地がある。そのほかの面では中国がこれまで実際にかけていた関税はかなり低いので、おそらく農業が受ける衝撃はかなり大きいけれども、その衝撃はものすごく大きなダメージを与えるものではない。このことは強調しておかなければならない。

衝撃が比較的大きいのはおそらくサービス業であろう。金融、流通の分野では、銀行、証券、



上海証券取引所は中国の二大証券取引所の一つである（撮影・劉世昭）